

小 犬

朝 幼稚園の入口に來かゝると寄宿合の塀により添つて玄關わきに一匹の小犬が横になつてゐる。特に早く來る男の子が三四人そのまはりにかつて撫でゝやつてゐた。

そのまゝ犬の事はすつかり忘れてゐると、しばらくの後、大きい組の丑君が室にはいつて來て「先生、犬小屋作つてくれない」とさく。

あゝ、今朝のあの犬のためか。

出來上つた停車場や家か床にゐてゐるので、そこに立かけてある板ですぐ犬の爲の小屋が出来るものと思ひ込んで丑君は來て呉れたのだ。

何かいゝ方法はないものかと顔をヂツと見つめながら考へたけれど。

「積木でこさへてやつたら？」

「ぢきこはしちやうよ」ほんとにね。

「これ持つて行つていゝ？」

作りかけの家を持つて行かれちや少し困る。ぢやこれ借して上げるからと云つて積木の空箱を持たせてやつた。室を出て行く小さい姿を見送りながらどんなにしてゐるかと思たくなりついで行く。

犬は湯島通りの煉瓦塀によりそつて長々とねてゐる。玄關に居たのをあきたらで自分達の遊びなれたこんな奥の方迄連れ込んですつかりお客様にしたつもりでゐるらしい。傳へきいて集つた子供達が多勢まはりにきてゐる。小さい組の子は手の出しようなくたゞ無言で見つめてゐる、大きい組の子は頭をなでたり猫のつもりで咽喉をさすつた

り、世話やきのM君は犬と同じ様にべつたり地べたに座つて小むづかしい顔をして、

「ほら君、そんなにそばに寄ると犬が苦しがるよ、

そんな所に立つちや陽があたらないよ」と注意してゐる。

小犬もすつかり安心してのどかにねてゐる。出来るだけのまごゝろでこの流浪の友？をいたは

り愛してゐる心のみつめてゐるとよく育てられて来た子供達よと深いよろこびといひ知れぬ尊さを感じてゐる。

春らしいおだやかな陽が庭一めんをあたゝかにしてゐて久かたぶりで出された出まどの棕櫚竹の

葉も 小きさみに春の朝風にゆらいで居た。(Y子)

吉備保育會の春期講習會

一、期 日 昭和四年三月二十七日より三日間 午前九時より午後四時まで

一、會 場 岡山縣女子師範學校附屬幼稚園 電車 柳川停留場より北一町半

一、題目及講師 生活による教育 東京女子高等師範學校教授

遊 戯 同上 助教授 倉橋 惣三氏

一、會 費 金 參 圓

一、會員と申込 イ、男女を問はず ロ、三月二十日までに會費を添へ岡山縣女子師範學校附屬幼稚園内

一、宿 泊 「岡政」宛御申込みのこと 希望者には便宜あり